

## オリヴィアの物語 — 『十二夜』

朱 雀 成 子

### 1. 序

オリヴィアは、オーシーノーやヴァイオラから、“proud” (1.5.254)<sup>1)</sup>、“fair cruelty” (1.5.292)、“uncivil lady” (5.1.110)、“marble-breasted tyrant” (5.1.122)などと評され、観客や読者からも「高慢な女」としてネガティブに捉えられることがある。このような評価の背景には、彼女がオーシーノーの愛に報いなかったことがある。ここには、女は男から愛されると、たとえ彼女がその男を好きでなくとも愛し返すべきであるという「基準」がみえる。

オリヴィアは、オーシーノーの愛に報いなかったばかりか、その小姓であるシザリーオに魔術にかかったように魅惑“enchantment” (3.1.114)され、その愛を求める。このオリヴィアの「逸脱」した情熱が、実は劇を進行させる推進力となっていて、オリヴィア、オーシーノー、ヴァイオラの間を膠着した三角関係を打破する力となるのである。オリヴィアは、ヴァイオラのようにもつれた関係を時に任せたりはしない。以下では、オリヴィアの物語をジェンダー、セクシュアリティ、階級などの点を踏まえてみていこう。

### 2. 劇の初めのオリヴィアの表象

劇の初め、オーシーノーによって語られるオリヴィアの表象は、オーシーノーが作り上げた女の幻想としての女神像である。オーシーノーはオリヴィアに恋し、幾度も使者を送る。しかし、オーシーノーの求婚を“the old tune” (5.1.106)と評するオリヴィアの言葉からわかるように、公爵の伝統的

なペトラルカ風の求婚は、オリヴィアを食傷気味にする (It is as fat and fulsome to mine ear / As howling after music(5.1.107-8))。オリヴィアはオーシーノーの海のように飢えた男の情熱 (“But mine is all as hungry as the sea, / And can digest as much” (2.4.101-2)) を拒否することに、ある種の喜びを感じる風でもある。一方、オーシーノーは報われない恋を恋することに耽っている。二人の求婚と拒否の関係は世間のうわさにまでなっており、ある種のゲーム、馴れ合いの関係、共犯関係を匂わせる。

オリヴィアは、オーシーノーが作り上げた女神像にふさわしく、兄の死を悼んで憂鬱に身を蝕ませる (“... being addicted to a melancholy” (2.5.202-3))。一日一回涙を流して7年間は兄の喪に服するというオリヴィアの言葉は、まさに「修道尼」 (“cloistress” (1.1.28))、あるいは寡婦を思わせる。オリヴィアの黒の喪服とヴェールは、父の死にこだわるハムレットを思わせ、屋敷内に留まって外界の様子に目を背けている。そのようなオリヴィア家の雰囲気や堅固に保持しているのが執事のマルヴォーリオであり、これを攪乱しようとしているのがマライヤやサー・トービー、それにフェステたちである。しかし、サー・トービーがアンドルー・エーギュチークに姪との結婚をけしかけたり、マライアがマルヴォーリオにオリヴィアとの結婚を夢想させたりするふざけた目論みは成功しない。彼らの騒ぎはオリヴィアの閉塞的な状況を打破することにはならない。劇の初めのオリヴィアにとっては、父や兄の喪に服することが至上命令となっている。

### 3. シザーリオに魅かれるオリヴィア

このように自閉的なオリヴィアが、海から来た若者シザーリオに会うことで変化していく。オリヴィアはシザーリオによって性的欲望を解放され、尼僧、寡婦といった状況から抜け出す。一方、ヴァイオラはシザーリオに変装しているため、女の気持ち、性的欲望を押し隠さざるをえず、忍耐を強いられることは皮肉である。

シザーリオとセバスチャンは、おのおの、公爵とアントーニオから少年と呼ばれている。マルヴォーリオは、一人前の男と少年の間としてのシ

---

ザーリオの存在を、食べ物イメージでもって、「豆になる前のサヤエンドウ」、「色づく前の青りんご」と表現する。

Not yet old enough for a man , nor young enough  
for a boy : as a squash is before 'tis a peascod, or a  
codling when 'tis almost an apple. (1.5.158-60)

オーシーノーは、シザーリオに男ではなく乙女としての役割をみている。オーシーノーはシザーリオを分節化してみせる。女神ダイアナを思わせる滑らかな赤い唇、乙女のような透き通った声をしたシザーリオは、女の器官、女の役割(“a woman's part”(1.4.34))を有している。

Diana's lip

Is not more smooth and rubious : thy small pipe  
Is as the maiden's organ, shrill and sound,  
And all is semblative a woman's part. (1.4.31-34)

一方、オリヴィアは父と兄亡きあと家長としての実権を行使しており、双子の兄妹より年をとっていると考えられる。オリヴィアは自分より若いシザーリオの扱いに困惑する。

How shall I feast him? What bestow of him ?  
For youth is bought more oft than begg'd or borrow'd.  
I speak too loud. (3.4.2-4)

オリヴィアはどのように若者をもてなし、何を与えれば喜ばせられるかと模索している。年上の女がよくやるように、若い恋人の関心をお金で買うことも考える。ここには、喪中のオリヴィアではなく、求愛を押し進めていこうと大声で(“speak too loud”)案を練っている、これまでと異なった

積極的なオリヴィアがいる。オーシーノーが予測したように、オリヴィアにたいしては、しかつめらしい使者(“a nuncio’s of more grave aspect” (1.4.28))よりも、シザーリオの若さと「女らしさ」が効を奏する。若者の完璧さ(“youth’s perfections”)がオリヴィアの目の中に忍び込み、彼女はその男性的ではない性的魅力に魅惑される。

Methinks I feel this youth’s perfections  
 With an invisible and subtle stealth  
 To creep in at mine eyes. (1.5.300-2)

まだ一人前ではない「男」シザーリオが年とともに成熟し、時が来たらシザーリオの妻となる人はハンサムな男(“a proper man”)を刈り入れる、とオリヴィアは収穫のイメージで次のように表現する。

Be not afraid, good youth, I will not have you,  
 And yet when wit and youth is come to harvest,  
 Your wife is like to reap a proper man. (3.1.133-35)

男を「収穫」して、屋敷内に囲いこんで自分のものにしたのが女のオリヴィアであり、ここには通常の、男が女を囲いこみ所有する関係を脱構築する要素がある。(オリヴィアは、後に4幕1場でセバスチャンを家の中に引き入れて、「収穫」してしまう(Go with me to my house, / And hear thou there how many fruitless pranks / This ruffian hath botch’d up, ... (4.1.53-55))。)

オリヴィアとシザーリオの関係は、美少年アドーニスと彼に魅かれるヴィーナスの関係を思わせる<sup>2)</sup>。豊かなセクシュアリティをもつヴィーナスは、女を受け入れようとしないアドーニスを“cold and senseless stone”(211)<sup>3)</sup>と非難し、アドーニスに哀れんでくれ“pity”(257)と頼む。オリヴィアもシザーリオの哀れみ(“I pity you,”(3.1.125))を愛へと移行させたがっ

---

ている (“That’s a degree to love.” (3.1.125)) がうまくいかず、切々と訴えても乗ってこないシザーリオの “a heart of stone” (3.4.203) に対して、恨みがましく述べている。

I have said too much unto a heart of stone,  
And laid mine honour too unchary out: (3.4.203-4)

#### 4. オリヴィアの自己商品化

オリヴィアがシザーリオに対してとる戦略は、自分自身の商品化である<sup>4)</sup>。7年間は顔を見せないと公言していたオリヴィアは、シザーリオの頼みでいとも簡単にその決心を破って、まるで財産目録のように、唇、目、まぶた、首、あごを見せる。男が女を分節化しようとするのが普通であるが、ここでは女のオリヴィアが自ら自分自身を分節化してみせる。

I will give out divers schedules of my beauty. It shall be  
inventoried, and every particle and utensil  
labelled to my will. As, item, two lips indifferent  
red: item, two grey eyes, with lids to them;  
item, one neck, one chin, and so forth. (1.5.247-252)

この場面のオリヴィアは、シザーリオの批判通りに高慢 (“...you are too proud,” (1.5.254)) とみなすべきなのであろうか。筆者はこの場面を、オリヴィアが心魅かれた若者シザーリオに自分の顔を見せたいという彼女の自己表現の場と捉える。このとき初めてオリヴィアの気持ちが外に向いたわけだ、この場面が彼女の転回点になっている。

シザーリオは、使者でありながらテキスト (1.5.235-36) からはずれてオリヴィアの素顔を見たがった。オリヴィアがヴェールを取って素顔をあらわしたのに対して、シザーリオは自分の素顔 (実はヴァイオラであること) を見せてはいない。オリヴィアが手の内をさらけ出した分、彼女のほうが

不利で、二人の顔合わせはオリヴィアの負けである。商品として並べて見せた彼女の眼はシザーリオを見つめ、勝手に好きになって囚われてしまう。恋をするとこんなに変わり身が早いのかと、オリヴィア自身が驚愕している (“Even so quickly may one catch the plague?” (1.5.299))。

オリヴィアは、シザーリオがあたかも指輪を彼女のもとに置いていったかのように、マルヴォーリオにもって行かせる (“I did send, / After the last enchantment you did here, / A ring in chase of you.” (3.1.113-15))。女から男に与える指輪は、『ヴェローナの二紳士』のジュリアが恋人プロテュースに与えるそれのように、愛の不変、貞節の意味がある<sup>5)</sup>。オリヴィアが求愛を押し進めるための自己商品化は、自分の肖像画のついた宝石をシザーリオに渡して、口説いたりしないのもっていてほしいと売り込むところ (“Here, wear this jewel for me, 'tis my picture: / Refuse it not, it hath no tongue to vex you: (3.4.210-11))にも表われる。

## 5. オリヴィアの恋の苦しみ

オリヴィアは熊いじめの比喩を用いてシザーリオの残酷さにふれる。オリヴィアの貞潔 “mine honour” (3.1.120)は杭 “the stake” (3.1.120)に繋がれた熊、シザーリオは歯をむき出した “unmuzzled” (3.1.121)犬に喩えられる。二人の「恋愛」における力関係は、シザーリオのほうが強く、オリヴィアはなされるままの受け身である。オリヴィアは、ヴェールを取っただけでなく、さらに彼女の心の奥底まで、プライドを捨ててさらけ出す (“...a cypress, not a bosom, / Hides my heart:” (3.1.106-7))。オリヴィアの恋の激しさを端的に表す言葉に

A fiend like thee might bear my soul to hell (3.4.219)

がある。オリヴィアはシザーリオを悪魔と見立てて、あなたとなら地獄に行ってもよい、とシザーリオに抗しきれない魅力を感じている。“fiend”, “soul”, “hell”という語は魂を売ったフォースタス博士を連想させ、“head-

---

strong potent fault”(3.4.206)と相まって、オリヴィアの奈落の底に沈んで行きそうな情熱の激しさを示す危険な言葉である。

しかしながら、オリヴィアの激しい情熱にもかかわらず、シザーリオは頑なに彼女を拒む。オリヴィアは恋するものの直感で、シザーリオがオーシーノーを「愛している」ことを嗅ぎとり苦しんでいたのではなかろうか。オリヴィアの言葉

Plight me the full assurance of your faith,  
That my most jealous and too doubtful soul  
May live at peace. (4.3.26-28)

の深層には、そのような解釈を許すものがあると思う。表面上はシザーリオ（セバスチャン）がオリヴィアを本当に愛し彼女との結婚に同意しているのかどうか、オリヴィアが疑心暗鬼でいるのだと解釈できる。しかし、この言葉の深層には、オリヴィア自身も判然としないが、直観的に嗅ぎとったものがあると思う。オリヴィアが男装のシザーリオから受け取る感じは女らしいものであり、彼女はシザーリオに両性具有性を感じている。オリヴィアはシザーリオとオーシーノーの間に単なる主従関係を超えたホモセクシュアルなものを感じていたのかもしれないし、あるいはヘテロな関係を疑っていたのかもしれない。いずれにしても、オリヴィアは、シザーリオがオーシーノーを愛しているのを直感して、それゆえにシザーリオの愛が自分に向けられないと感じていたのではなかろうか。

## 6. 「逸脱」した愛、結婚

オリヴィアは彼女より上の身分、財産、年齢、知恵の男とは結婚しない、とトービーは述べている。これは、オリヴィアがシザーリオを愛するようになる伏線と思われる。オリヴィアのシザーリオ（セバスチャン）との結婚を「逸脱」とする<sup>9)</sup>要素を三つ指摘できる。第一は、オリヴィアのほうが階級が上である点である。Cristina Malcolmson は、マルヴォーリオもシ

ザーリオも gentleman の身分であるので、マルヴォーリオのオリヴィアとの結婚の夢も、オリヴィアのシザーリオとの結婚の夢と同様、社会的には混乱はない<sup>7)</sup>、と論じている。Malcolmson は、gentleman の身分を ruling class に位置づけており、オリヴィアと gentleman の結婚は逸脱ではないとしている。たしかに gentleman を ruling class に入れることは可能としても、knight より下は貴族(peerage)に入らないので、Malcolmson の論は必ずしも納得できない。オリヴィアは“Countess Olivia”(2.2.1)と呼ばれているが、countess の立場としてのオリヴィアが“the County’s man”(1.5.305)のシザーリオを愛することは、伝統的な階級システムを揺さぶりかねない。シザーリオの身分が貴族であることが、最後にオーシーノーによって語られる(“... right noble is his blood”(5.1.262))が、それまではオリヴィアも観客も、シザーリオやセバスチャンが gentleman であると思わされていることに留意すべきである。

二番目には、最初の階級の問題と重複するが、身分の高い女のほうが男を好きになって求婚するのは、モルフィ公爵夫人の例のように「逸脱」とみなされやすいことを指摘したい<sup>9)</sup>。オリヴィアのように、女のほうが積極的に求婚するのは、女性上位になりやすく男性優位が保たれない。ヴァイオラのように、「低い」身分の女が高い身分のオーシーノーを好きになるのは勝手に、玉の輿に乗れるか乗れないか分からないが、とにかく男のオーシーノーのほうが選択権を持つので男性優位が保持され問題はない。『終わりよければすべてよし』では、身分の低い娘ヘレナが貴族のバートラムを一方的に好きになり、彼を夫にする選択権までも得たことが、バートラムが彼女を嫌悪する一因となっている。バートラムは、彼の男性優位が揺らいだことに非常な抵抗を示したと考えられる。『お気に召すまま』では公爵の跡取り娘ロザリンドが貴族の3番目の息子オーランドーを恋するが、この場合は女のほうが階級が上であるけれども、二人ともが相思相愛なので問題ないと思われる。オリヴィアの場合は、彼女が一方的にシザーリオ(セバスチャン)に求愛したことで、女として「逸脱」した印象を与え、それゆえに観客や読者の共感を得られにくいと考えられる。

---

三番目には、オリヴィアのほうがシザーリオ（セバスチャン）より年齢が上と思われる点である。この劇で男女の年齢差は重要なテーマとなっている。オーシーノーは、シザーリオに結婚相手の女は年下を選ぶべきである、と繰り返し忠告している。

Let still the woman take

An elder than herself;(2.4.29-30)

Then let thy love be younger than thyself,

Or thy affection cannot hold the bent:(2.4.36-37)

オーシーノーの考えは、女のほうが早く老いやすいということと、女が年上ならば女性上位になりがちで男を支配する、男が年齢が上ならば男性優位が保たれやすい、ということであろう。オリヴィアがシザーリオを結婚相手として選択したことは、オーシーノーの父権的考えに反する果敢な行動である。年齢差に関しては、オリヴィアがマルヴォーリオと結婚した場合と彼女がシザーリオ（セバスチャン）と結婚した場合が対照的である。マルヴォーリオが、オリヴィアとの結婚生活を夢想して、オリヴィアはまだベッドで眠っており、自分が“Count Malvolio”(2.5.35)として叔父トビーに忠告を垂れるなど、家長として振る舞うところがある。オリヴィアより年齢が上であるマルヴォーリオは、オリヴィア家の家長として権力をふるい君臨することが予想される。一方、セバスチャンは、オリヴィアが一家を采配する能力を非常に評価している（“... yet if 'twere so, / She could not sway her house, command her followers, / Take and give back affairs and their dispatch, / With such a smooth, discreet, and stable bearing / As I perceive she does.”(4.3.16-20)）。オリヴィアとシザーリオ（セバスチャン）の結婚では、オリヴィア家の主導権を握るのはオリヴィアであることが予想される。

以上、階級差、女からの求婚、男女の年齢差の三点から、シザーリオ(セ

バスチャン) とオリヴィアの組み合わせは、オーシーノーとオリヴィアのそれよりも「不自然」で、「逸脱」した感じを与える。マルヴォーリオとオリヴィアの組み合わせは、不釣り合いかもしれないが、シザーリオ (セバスチャン) とオリヴィアのそれと比較すれば、より「自然」かもしれない。オリヴィア自身も、階級も年齢も富も彼女にふさわしいオーシーノーを愛せなくて、若く、身分も低いシザーリオを愛さざるをえない自分を狂気であると捉えている (“I am as mad as he / If sad and merry madness equal be.” (3.4.14-15))。また、彼女には、自分のシザーリオへの愛を「罪」fault であり、「基準」に反し、「逸脱」であることを自覚した言葉もある。

There's something in me that reproves my fault:

But such a headstrong potent fault it is,

That it but mocks reproof. (3.4.205-7)

しかしながら、彼女は性的にシザーリオに魅かれているので彼女の情熱を制御できないし、隠すこともできない (“I love thee so, that maugre all thy pride, / Nor wit nor reason can my passion hide” (3.1.153-54))。彼女の中に、デズデモーナに見るような「転倒的な」セクシュアリティを見ることができる<sup>9)</sup>。オリヴィアには、モルフィ公爵夫人の場合のように結婚を阻止する兄たちはいないが、オーシーノーが、彼女とのこれまでの関わりを通して、彼女の結婚にある程度の拘束力を持っているように思える。イリリア共和国内で、階級と富において、オーシーノーと互角の力を有しているのはオリヴィアである。オーシーノーは彼女との結婚により、彼女の権力と富を自分のものに統合できる。オリヴィアとの結婚が、財産目当てでは決してないという彼の言葉 (“The parts that fortune hath bestow'd upon her, / Tell her I hold as giddily as fortune.” (2.4.84-85)) にもかかわらず、それは無視できないものであったろう。オーシーノーは、オリヴィアとシザーリオの組み合わせに、可愛がっている小姓に裏切られたという感じだけでなく、性的に逸脱したもの、社会的に逸脱したのを感じたの

ではなかろうか。

この劇中での男女の組み合わせの中で、一番「自然」で祝福を受けやすい組み合わせは、オーシーノーとヴァイオラである。ヴァイオラは、オーシーノーを恋していても黙って耐え、彼のために恋の使いをし、しかも男から手を差し伸べられて初めて結婚に同意するので、「女らしく」、皆の共感を得られやすい。ヴァイオラの結婚は、前述の三点をクリアしているので「正統」という印象を与える。一方、オリヴィアの結婚は、セバスチャンが貴族の出身とわかってもお、女からの求婚、年上の女と年下の男という年齢の問題が残っている。オーシーノーとヴァイオラの組み合わせに比べて、オリヴィアとセバスチャンの組み合わせは、「自然」さに欠ける。しかし、その「逸脱」はヴァイオラとオーシーノーの「正統」な結び付きの陰に隠されていて見えにくい。

## 7. 主導権を握るオリヴィア

オーシーノーの怒りの言葉

Why should I not, ....

Kill what I love ? (5.1.115-17)

Him will I tear out of that cruel eye

Where he sits crowned in his master's spite (5.1.125-6)

I'll sacrifice the lamp that I do love, (5.1.128)

は、悲劇への包芽をはらんでおり、この場面はまさに修羅場と化しかねない様相を呈している。オーシーノーは、盗賊 Thyamis が恋に落ちた美女 Chariclea を殺そうとした<sup>10)</sup>ように、オリヴィアにシザーリオを取られるくらいならシザーリオを殺す覚悟をしている。“kill”, “tear”, “sacrifice” という語が示すオーシーノーの暴力は、女のオリヴィアではなく、ser-

vant であるシザーリオに向けられることに注意すべきである。つまり彼の暴力は、ジェンダーとして弱い女ではなく、階級的に下の者に向けられるのである。オリヴィアを “the marble-breasted tyrant” (5.1.122), シザーリオを “this your minion” (5.1.123) と軽蔑的に呼び、シザーリオを自分の下のものとして軽んじるオーシーノーに、オリヴィアは叫ぶ。

... it is the baseness of thy fear  
 That makes thee strangle thy propriety.  
 Fear not, Cesario, take thy fortunes up,  
 Be that thou know'st thou art, and then thou art  
 As great as that thou fear'st. (5.1.144-48)

オリヴィアは、ここで非常にラディカルな発言をしている。つまり、小姓に主人に反逆する行為を焚き付けている。“fear” という語が三度も使われていることから分かるように、オリヴィアはシザーリオが主人に対して抱く身分の差からくる恐れを警戒している。その恐れこそが、オリヴィアとシザーリオを引き裂くものだからである。また、“great” という語は、マルヴォーリオがオリヴィアとの結婚により “great” になろうとした (“And some have greatness thrust upon them.” (3.4.44) ことと呼応する。オリヴィアは、自分との結婚によってシザーリオが伯爵としての地位を獲得し、オーシーノーと同様に “great” になることを熱望している (かつて、オリヴィアはシザーリオが自分の servant になることを嫌う発言をしている (My servant, sir? 'Twas never merry world / Since lowly feigning was call'd compliment: / Y'are servant to the Count Orsino, youth. (3.1.100-102))).

オリヴィアがセバスチャンを夫として選んだために、オーシーノーはセバスチャンの妹であるヴァイオラを妻に迎えることでオリヴィアと親戚になる。“wife” (5.1.316) としてではなく、“sweet sister” (5.1.383) としてオリヴィアと親戚関係になることは、オーシーノーにとって有利であろう。

---

オリヴィアの財産や女主人としての実力は、結婚の場所もオリヴィア邸、費用もオリヴィアもちで行うことを彼女が提案し、オーシーノーが快諾するところにも明示されている。

My lord, so please you, these things further thought on,  
To think me as well a sister, as a wife,  
One day shall crown th' alliance on't, so please you,  
Here at my house, and at my proper cost. (5.1.315-18).

オリヴィア家は、サー・トービーなどの近親者が寄宿し、道化のフェステ、マライア、フェービアンなどさまざまな人が出入りしており、父権的な家族を形成している<sup>11)</sup>。オーシーノー家が恋一色で、複雑な人間関係が排除されているのと対照的である。オリヴィアは、この家で能動的な支配的な位置を占める。このオリヴィアと結婚したセバスチャンは、彼女との間にオーシーノーやマルヴォーリオと異なる関係を築くことが可能であろう。

*Olivia.* Nay, come, I prithee; would thou'dst be rul'd by me !

*Seb.* Madam, I will.

*Oli.* O, say so, and so be. (4.1.63-64)

上記の言葉に今後の二人の関係が暗示されているように思う。涙もろい点など、「女性性」をのぞかせるセバスチャンならではの言葉である。“flood of fortune”(4.3.11) を獲得したセバスチャンは、オリヴィアが主導的にオリヴィア家を維持していくことに手を貸し、彼女に支配される側にまわるであろう。

注

- 1) テキストは、J.M.Loithian と T.W.Craik 編のアーデン版を使用した。
- 2) ヴィーナスとアドーニスの関係について Kenneth Burke は、‘The real subject is not primarily sexual lewdness at all, but “social lewdness” mythically expressed in sexual terms.’と指摘しており、オリヴィアとシザーリオの関係を考察するうえで興味深い。Frank Whigham. “Sexual and Social Mobility in *The Duchess of Malfi*,” *PMLA*, 100 (1985), pp.167-86を参照。
- 3) 『ヴィーナスとアドーニス』のテキストは、John Roe 編のニュー・ケンブリッジ版 *The Poems* を使用した。
- 4) 女の商品化、および女の分節化は、Karen Newman. *Fashioning Femininity and English Renaissance Drama* (Chicago, London: Chicago University Press, 1991)に論じられている。
- 5) 『ヴェニスの商人』、『シンペリン』などでも、ポーシャやイモージェンが男に愛の不変や貞節の意味を込めて指輪を渡している。
- 6) Lisa Jardine も、オリヴィアのシザーリオへの愛を社会的、性的に逸脱とみなしている。  
 “Of course, the erotic twist in *Twelfth Night* is achieved by the irony that it is *Olivia*—the lady of significant independent means and a disinclination to submit herself and her lands to any ‘master’—whose eroticized relationship of ‘service’ with Cesario is most socially and sexually transgressive.” Lisa Jardine. “Twins and travesties: gender, dependency and sexual availability in *Twelfth Night*,” *Erotic Politics: Desire on the Renaissance Stage*, ed. Susan Zimmerman (New York and London: Routledge, 1992), p. 33.
- 7) Cristina Malcolmson. “‘What You Will’: Social Mobility and Gender in *Twelfth Night*,” *The Matter of Difference: Materialist Feminist Criticism of Shakespeare*, ed. Valerie Wayne (Ithaca, New York: Cornell University Press, 1991), p.38で、Malcolmson は次のように論じている。“But Malvolio’s dream of marrying Olivia is in principle no more socially disruptive than Olivia’s dream of marrying what she takes to be the gentleman Cesario.”
- 8) モルフィ公爵夫人の執事アントニオに対する「逸脱」した情熱については、Frank Whigham の前掲書 p.171を参照。
- 9) デズデモーナは、黒人でローマの雇われ將軍、年齢もかなり上のオセローを結婚相手に選択したことで、父親やイアゴー、批評家たちから、彼女の情熱は「逸脱」、「転倒」とみなされがちである。

- 
- 10) ギリシャの物語作家 Heliodorus の *Ethiopica* に出てくる盗賊 Thyamis は、自分が捕虜とした女 Chariclea を愛するようになる。彼は、別の盗賊たちに襲われたとき、Chariclea を洞窟の中で殺そうとするが、幸運にも殺したのは別の女であった、という物語から。アーデン版テキストの p.137. を参照。
- 11) Lisa Jardin は、当時の家族というものを次のように述べている。“‘The household was the classic form of patriarchy’, writes Alan Bray (1982:51). In the period with which we are concerned, ‘family’ and ‘household’, as descriptions of the ordered unit for communal living, designate groupings which include both close and distant kin, and a range of non-kin. There is a constant ‘drift of young person’ (as David Herlihy calls it), a flow of young adolescents into and out of the wealthier households—both of distant kin, and of non-kin in ‘service.’” 詳細は Lisa Jardin の前掲書 p.29. を参照されたい。